

幼児における人間の成長段階についての認識

濱田 祥子¹・杉村伸一郎²

Young children's understanding of stages of human development

Shoko Hamada¹, Shinichiro Sugimura²

Abstract : The self-concept is composed through the interaction with others (Mead,1934). As self-conceptual study in early childhood, most targets the same age others. However, it is thought that the existence of the others at other stages of development brings the influence to the self-concept if the self-concept is composed by the interaction with others. The present study aimed to search for children's understanding of stages of human development and children's self-concept by the comparisons between others at other stages of development. Then, the card task and the interview were executed. In card task, participants were made to arrange it in order of growth with baby, child, grade-schooler, adult, and old people's five photograph cards. As a result, being able to arrange correctly was 4years old 22%, 5years old 43%, and 6years old 96%. In the interview, it was heard to participants to understand four stages of development other than child. Afterwards, it was asked which was good as them who that were each stages of development and present. As a result, it was shown to come to catch the feature of each stages of development more deeply as the age went up though it was knowledge that relied on the overall, visible side. Moreover, in the comparison with other stages of development with present participants, it has been understood that 4years satisfaction to the self is high, 5years have the individual variation, and 6years hold the yearning to the old people except the older person.

Key Words : time perspective, other's understanding, self-consciousness

問題と目的

私たちは時間の中に生きている。時間は連続して流れ、その流れとともに私たちは変化する。そのような時間軸上において自己を捉えることは、生涯発達の見点において重要であるとされている(塚野, 1993)。

過去・未来・現在という一方向に進む時間を生きる自己についての理解は、時間的展望(time perspective) 研究で検討されてきた。しかし、その多くが小学生以降の年齢を対象としており、幼児期の時間的展望研究に関する研究はほとんどない。現時点で参考になるのは、幼児

の将来の夢を調べた研究と、時間軸上で変化していく自己に対する意識を検討している研究の2つである。

まず、幼児に将来の夢を調べた研究であるが(森, 1995; 富田, 2004), これらの研究では、幼児の回答について空想/現実の観点から分類し、幼児がいつ頃から空想と現実を区別することができるのかを検討している。そして、4, 5歳児は空想的な夢をあげる割合が高く、6歳児になるとその回答は急激に減り、現実的な夢をあげる割合が高くなることを示した。しかし、両論文とも考察において、そもそも幼児は“将来の私”を想定して回答したのだろうかという疑問を挙げている。“将来の私”を想定するためには、“私”は連続して同一の存在であり、かつ時間の変化に伴って変化してゆく存在であ

1 東京都武蔵野市
2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

ることの認識が必要であるとし、“将来の私”の捉え方が大人とは質的に異なるのではないかと指摘した。この疑問点こそが、幼児の時間的展望研究の少なさの大きな理由であろう。

次に、過去や未来の自己への意味づけの様相を探った研究として、Zazzo (1969/1974) の『発達の力動過程検査』がある。この検査では、幼児に、いくつかの年齢のうち、自分が一番なりたい時期（選択）、なりたい時期（受容）、なりたくない時期（拒否）を問い、さらにそれらの理由づけをさせた。日本の4～6歳児を対象に『発達の力動過程検査』を実施した都筑(1981)の研究では、5、6歳児は4歳児と比べて「自分の今の年齢」の選択が多く、「大人」の選択が少なく、「赤ん坊」の拒否が多いという、Zazzoと同様の結果が得られている。「自分の今の年齢」の選択は自己に対する満足が大きいことを示すとされ、年齢が高くなるにつれて自己への満足が大きくなると考えられる。

さらに、都筑(1981)は、自己の将来の発達についての意識と、一年前の自己との変化についても検討した。その結果、将来の発達については、年齢が高くなるにつれて「早く1歳年上になること」と「早く大きいお兄さんになること」を拒否する者が増加した。これも現在の自己への愛着が増大した結果とされる。また、一年前の自己との変化については、4～6歳児にかけて、身体的成長が19.1%、17.4%、12.9%と減少するのに対して、学校に関することが13.5%、16.3%、37.1%と増加した。このことは、自己に内在する身体的成長・発達の価値の自覚から社会的な成長・発達の価値の自覚へと、幼児の自己の将来の発達についての意識が移ってゆくことを示しているといえよう。

これらの結果から、幼児も時間軸上における自己について多少なりとも思考をめぐらせることができることがわかる。では、対象が自己ではなく、他者であった場合はどうであろうか。

Mead (1934) は、自己は他者との相互作用を通して理解され、幼児期における他者認識は自己認識に大きな影響をもたらすと述べた。つまり、他者を見ることによって自己について知るのである。幼児期の自己認識研究は、多くが同年齢の特定の幼児との比較によるものである(橋本・松永, 2006)。しかし、社会は様々な年齢の人によって構成されており、それぞれの特徴や役割がある。時間軸の視点で捉えれば、他の成長段階にある人々は、自己の過去や未来を

映し出す姿でもある。自身についての時間的展望をもつことが困難な幼児であっても、他者という目に見える対象に自己を投影することは可能ではなからうか。そうであるならば、他の成長段階にある人と自己との比較は、時間軸上における自己意識に何らかの影響をもたらすのであろう。

そこで、本研究では、幼児が他の成長段階についてどのような認識を持っており、また、それらと比較して現在の自己をどのように捉えているのかを検討することを目的とする。

この目的のため、上述したZazzo (1969/1974) の『発達の力動過程検査』を用いることとする。しかしながら、『発達の力動過程検査』は択一形式の選択結果の分析に終わっている。そのため、各成長段階についての認識や、それぞれと自己との比較については明らかでない。したがって、以下の3点の変更を加えて実施する。

1点目は、突然にどれがよいかを選択させるのではなく、各成長段階についてどのような認識を持っているかを先に質問することである。質問をすることによって、その成長段階についての認識が選択に反映されると考えたためである。

2点目は、複数選択ではなく、「今の自分」と「他の成長段階」を一对一で組み合わせる点である。これは、現在の自己を時間軸上でどのように捉えているのかを検討するためには、それぞれの成長段階との比較が必須であると考えたためである。

3点目は、選択肢に「小学生」「老人」を加えた点である。小学生は、幼児が次に所属することとなる社会的集団であり、重要な対象であると考えられる。また、人間は大人が最終段階ではなく、その次に老人という段階を踏むので、生涯発達の視点から老人も重要な対象であると考えたためである。

方 法

調査対象児 年少児23名(平均年齢4歳4ヶ月)、年中児67名(平均年齢5歳3ヶ月)、年長児45名(平均年齢6歳4ヶ月)、計135名。

調査内容 ①カード課題 幼児が人間の成長過程を理解しているかを検討するための課題である。5つの成長段階(赤ちゃん・幼児・小学生・大人・老人)の人物の顔写真カードを成長順に配列させた(カード配列課題)。カードは対象児と同性のものを用いた。

また、自己と親の成長についての理解を調べるために、過去（自分が生まれたとき）、現在、未来（自分が大人になったとき）における自己と親の姿を上記の5枚の写真から選択する課題も実施した（カード選択課題）。

②成長段階についての認識と自己との比較
赤ちゃん・小学生・大人・老人についてインタビューを実施した。1枚ずつ写真を呈示し、最初に「知っていること（認識）」を尋ね、次に「自分と違うところ（比較）」について尋ねた。その後、今の自己とその成長段階になるのとどちらがよいか選択してもらった。また、選択理由についても尋ねた。

結果と考察

カード課題

カード配列課題では、全てを正しく配列できた場合のみを正答とした。正答率は年少児22%、年中児43%、年長児96%であった（ $\chi^2(2) = 41.64, p < .01$ ）。顔写真のみで成長順に並べることは年長になるまでは困難なようだ。この結果は、顔の情報を手がかりにした場合、6歳までに年齢の上下判断を正確に行えるようになるという先行研究のレビュー（中島，2002）と一致する。ただし、年少児においては質問の意味がわからなかったという可能性も考えられる。

カード選択課題における各年齢の正答者数と正答率をTable 1に示す。この結果から、過去の親の姿を判断することは年少児にとって困難（ $\chi^2(2) = 11.62, p < .01$ ）、現在の自己と親の姿を判断することは年少児には困難（それぞれ $\chi^2(2) = 4.63, .05 < p < .10$ ； $\chi^2(2) = 17.63, p < .01$ ）、未来の自己と親の姿を判断することは年少児・年中児には困難（それぞれ $\chi^2(2) = 30.63, p <$

.01； $\chi^2(2) = 31.98, p < .01$ ）であることが示唆された。

これらの結果から、年長児は、時間の流れに伴って自己も親も姿が変化することを捉えていると考えられる。年中児は、現在・過去の自己と親の姿については正確に捉えているが、まだ見ぬ未来の姿を捉えることは困難であるようだ。年少児は、過去、生まれた時に自分は赤ちゃんの姿をしていたことは理解しているようであるが、その他の理解は困難なようである。

成長段階についての認識と自己との比較

認識と比較についての回答は、1度の質問につき最初の3つまでの回答を分析対象とした。

認識 他の年齢と比べて年少児は無回答者が多かった（年少では累計回答者92の内70（76.0%）、年中では268の内139（51.9%）、年長では180の内55（30.6%））（ $\chi^2(2) = 52.40, p < .01$ ）。また、小学生については、全ての年齢において他の成長段階と比較して無回答者が多かった。小学生は、兄姉がいない限り日常生活においてかかわることがなく、そのために無回答者が多かったと考えられる。

また、認識水準についても分析をした。認識水準とは、幼児の回答が成長段階についての一般的なものについてであるか、もしくは特定の人物や提示した写真等の具体的なものについてであるかを分類したものである。その結果、年少児・年中児は具体的対象について語り、年長児は尋ねられた成長段階についての一般化した知識を語るという違いがみられた（Table 2）。

さらに、どのような側面に着目した回答をしたかを分析するため、自己認識と他者認識を扱った橋本・松永（2006）を参考に6種類の回答カテゴリを作成した（Table 3）。

Table 1 カード選択課題における正答者数と割合（%）

年齢	現在		過去		未来	
	自己	親	自己	親	自己	親
年少	14 (60)	11 (48)	17 (74)	10 (43)	5 (22)	3 (13)
年中	54 (81)	50 (75)	51 (76)	39 (58)	31 (46)	26 (39)
年長	37 (82)	42 (93)	42 (93)	37 (82)	39 (87)	36 (80)

Table 2 各年齢における認識水準別の回答数

	年少児	年中児	年長児
具体的	11	47	35
一般的	19	132	202

Table 3 回答カテゴリ

直接的側面	外的	外見 (ex. 身長, 顔, 髪の毛等)
		行動 (ex. 笑う, はいはい等)
間接的側面	内的	性格特性 (ex. 優しい, 格好いい等)
		生物学的要素 (ex. 年齢, 病気等)
間接的側面	所有物 (ex. 車, ランドセル, 杖等)	
	社会的要素 (ex. 学校, 仕事等)	

まずは直接的側面であるか間接的側面であるかの2側面に分類した。直接的側面は、さらに外的側面と内的側面との2側面に分類した。

外的側面には『外見』と『行動』の2側面を設けた。『外見』とは表面的に判断できる外見の特徴に関するものである。例えば、「背が高い」「髪が白い」「手が小さい」等がこのカテゴリに分類される。『行動』とは特定の場面や日常的な場面での行動に関するものである。「泣く」「料理をする」「足が速い」等がこのカテゴリに分類される。

また、内的側面には『性格特性』と『生物学的要素』とを設けた。『性格特性』とは性格に関するものである。例えば「優しい」「真面目」「怖い」等がこのカテゴリに分類される。『生物学的要素』とは、生物学に関するものである。「生まれただけ」「病気になる」「弱る」等がこのカテゴリに分類される。

さらに、間接的側面には『所有物』と『社会的要素』の2カテゴリを設けた。『所有物』とは所有しているもの、または所有していることについての言及である。例えば「ゲームを持っている」「車に乗る」「杖を持っている」等がこのカテゴリに分類される。『社会的要素』とは、所属や社会的役割など、社会に関するものである。「学校に行く」「赤ちゃんを育てる」「仕事に行く」等がこのカテゴリに分類される。

この回答カテゴリを基に回答を分析した結果、年少児においては、『外見』『行動』に関する回答が一番多かった(両カテゴリとも、全回答30の内12(40.0%))。年中児と年長児においては、『外見』に関する行動が一番多く(年中では全回答179の内111(62.0%)、年長では237の内135(57.0%)、次いで『行動』に関する回答が多かった(年中37(20.7%)、年長59(24.9%))。やはり、可視的側面は幼児にとって捉えやすい特徴なのであろう。

その後、それ以外の各年齢の特徴をみるにあたって、年少児は回答数が少ないため分析から除外した。年中児は小学生について『所有物』に関する回答をする傾向がみられた(『所有物』に関する全回答8の内5(62.5%))。年長児は大人について『社会的要素』、老人について『生物学的要素』に関する回答をする傾向がみられた(『社会的要素』、『生物学的要素』の順に、5の内4(80.0%)、11の内9(81.8%))。

これらの結果から、年齢が上がるにつれて各成長段階について語るができるようになる

ことが示された。その内容は、全体的に外見などの可視的な要素に着目する傾向はあるものの、年齢が上がると次第に各成長段階が直面する様々な特徴を捉えられるようになることがうかがえた。

比較 まずは、回答することができたかどうかであるが、年少児は他の年齢と比べて無回答者が多かった(年少では累計回答者92の内48(52.2%)、年中では268の内77(28.7%)、年長では180の内34(18.9%))($\chi^2(2) = 32.60, p < .01$)。また、比較の対象については認識水準と同様に、幼児の回答が成長段階についての一般的なものについてであるか、もしくは特定の人物や提示した写真等の具体的なものについてであるかに基づいて分類した。その結果、年少児・年中児は名前や顔といった個人差について回答し、年長児は成長段階による違いについて回答するという傾向がみられた(Table 4)。

さらに、どのような側面に着目した回答をしたかをTable 3の回答カテゴリを用いて分析した。その際、比較においては『同じ』『全部』という回答が見られたため、これらをカテゴリに加えた。

分析の結果、全年齢において全ての成長段階について、ほとんどが『外見』に関する違いを回答していた(年少では全回答47の内43(91.5%)、年中では262の内185(70.6%)、年長では203の内104(51.2%))。これ以外の各年齢の特徴をみるにあたって、回答数の少ない年少児は分析から除外した。年中・年長ともに、小学生について『所有物』『社会的要素』に関する自己との違いを回答する傾向がみられた。

また、『同じ』や『全部』と回答した人数を比較した。その結果、年中児は年長児と比較して『同じ』、『全部』と回答する傾向があることが示された(『同じ』は年中では累計回答者191の内18名(9.4%)、年長では146名の内4名(2.7%)、『全部』は年中26(13.6%)、年長8(5.5%))。この結果から、1割程度ではあるが、年中児は他の成長段階と自己は同じである、もしくは全く違うという二極的な捉え方をしていることがうかがえた。一方、年長児は、同じ部分があれば違う部分もあるという複雑な捉えを

Table 4 各年齢における比較水準別の回答数

	年少	年中	年長
具体的	40	126	30
一般的	7	136	173

しているのではないかと考えられる。

さらに、認識・比較の質問における無回答者数について分析をした。その結果、全年齢において、比較の質問よりも認識の質問の方が、無回答者数が多かった（年少・年中・年長それぞれ $\chi^2(1) = 11.44, p < .01$; $\chi^2(1) = 29.81, p < .01$, $\chi^2(1) = 6.58, p < .05$ ）。したがって、幼児にとって、成長段階について知っていることを回答するよりも、自己との違いについて回答するほうが容易であるということが考えられる。

選択 現在の自己と比較したときの各成長段階の選択割合をFigure 1に示す。赤ちゃんはどの年齢においてもほぼ選択されなかった ($\chi^2(2) = 9.56, p < .01$)。小学生は年少児、年中児は半々、年長児では80%が選択した ($\chi^2(2) = 8.55, p < .01$)。大人は年少児、年中児は半々、年長児では71%が選択した ($\chi^2(2) = 4.66, p < .10$)。老人はどの年齢でもあまり選択されず、特に年長児はほとんど選択しなかった ($\chi^2(2) = 6.48, p < .05$)。

また、個人の選択の組み合わせを年齢ごとに集計し (Figure 2), 比較した ($\chi^2(6) = 38.57, p < .01$)。Figure 2の右上の表記については、左から、赤ちゃんと自己、小学生と自己、大人と自己、老人と自己との組み合わせにおける選択を示す。つまり、 $\langle \text{自} \cdot \text{自} \cdot \text{自} \cdot \text{自} \rangle$ とは、全ての組み合わせにおいて自己を選択したということである。 $\langle \text{自} \cdot \text{小} \cdot \text{大} \cdot \text{自} \rangle$ とは赤ちゃんとは自己を選択し、小学生と大人とでは比較対象の方を選択したということである。また、 $\langle \text{自} \cdot \text{小} \cdot \text{大} \cdot \text{老} \rangle$ とは、赤ちゃんとは自己を選択し、小学生と大人と老人とでは比較対象の方を選択したということである。

各年齢の特徴をみると、年少児は $\langle \text{自分} \cdot \text{自分} \cdot \text{自分} \cdot \text{自分} \rangle$ が43%、 $\langle \text{自分} \cdot \text{小学生} \cdot \text{大人} \cdot \text{老人} \rangle$ が30%で、この2種類が多かった。

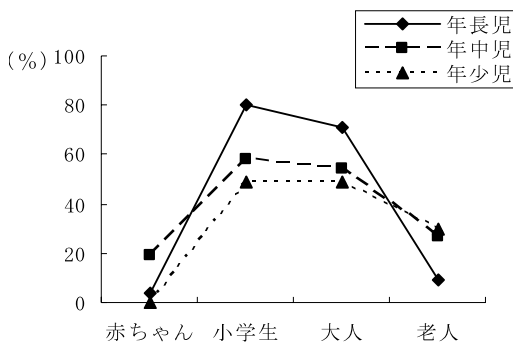


Figure 1 各成長段階の選択割合

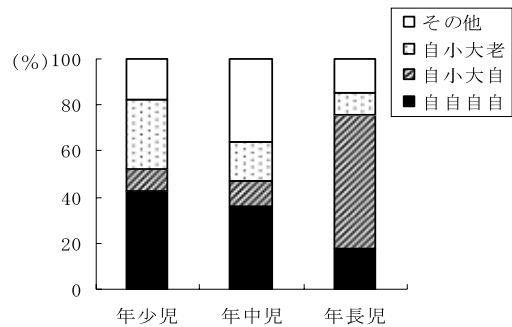


Figure 2 選択の組み合わせの割合

年中児で一番多いのは $\langle \text{自分} \cdot \text{自分} \cdot \text{自分} \cdot \text{自分} \rangle$ の組み合わせであったが、特定の傾向はなかった。年長児は $\langle \text{自分} \cdot \text{小学生} \cdot \text{大人} \cdot \text{自分} \rangle$ が58%と一番多かった。

選択理由については、上記の認識や比較の質問に対する回答同様、分析においてカテゴリ分類が必要であった。しかしながら、カテゴリ分類において、成長段階ごとの特徴が理由に反映されており、例えば「仕事が嫌」などは大人と自己との組み合わせにおいてのみに出てくる理由であった。そのため、全てに対応するカテゴリ分類が困難となり、基本的な部分は共通して用いたが、成長段階ごとにふさわしいと思われるカテゴリを設けた。

基本的なカテゴリとしては、『成長』『遊び』『感情』『能力』『人間関係』の5つが挙げられる。『成長』は、身長等の成長に基づくものである。『遊び』は、遊びに基づくものである。『感情』は、「嫌だから」「格好いいから」等の感情に基づくものである。『能力』は、「～ができる」「～できない」といった能力に基づくものである。『人間関係』は、友達や親などの人間関係に基づくものである。カテゴリ分類の結果、統計的結果は得られなかったが、以下に結果の概要を記す。

年齢ごとの特徴をみると、年少児は無回答が多かったが、小学生・大人・老人を選択した理由の多くは身体の大きさによるものであった。年中児・年長児において特定の傾向はなく、『成長』、『人間関係』、『社会的要素』、『生物学的要素』など様々な側面に関する理由を述べていた。このことから、年少児の価値は一樣に身体の大きさにあるが、年中児と年長児は様々な要素に視点を向けることができるようになることにより、それぞれ価値が生じるのではないかと考えられる。

また、それぞれの組み合わせにおける選択理由についてまとめる。まずは、自己を選択した場合の理由である。

赤ちゃんと比較したときに自己を選択した際の選択理由は、「大きくなったから」と、全ての年齢において『成長』を理由とする者が多かった（年少では選択者23の内8（34.8%）、年中では55の内17（30.9%）、年長では43の内12（27.9%）。このことから、幼児は赤ちゃんと比較して、自分は大きいという成長感を抱いており、そのことに満足していることがうかがえた。また、年中児においては「自分で食べられるから」「赤ちゃんは何もできないけど、僕はできる」といった『能力』を選択理由に挙げる者が『成長』に次いで多かった（13（23.6%））。これも自身の有能感、成長感の現れであろう。

次いで、小学生と比較したときの自己選択理由について述べる。年少児はほとんどが無回答であった（選択者12の内8（66.7%））。年中児においては、「駒で遊びたいから」「遊ぶほうがいいから」という『遊び』を理由に挙げる者が1番多かった（選択者28の内8（28.6%））。また、「（自分が）格好いいから」「小学生は変」という『感情』を挙げる者が2番目に多かった（6（21.4%））。さらに、「お友達と離れたくない」と『人間関係』を挙げるものが3番目に多かった（5（17.9%））。いずれにせよ、現在の自己や自己を取り巻く環境に満足していることがよく現れていた。年長児においては、そもそも小学生との比較において自己を選択する者が少なかったため、傾向までは探ることが困難であった。

続いて、大人と比較したときの自己選択理由について述べる。年少児はほぼ無回答であった（選択者12の内9（75.0%））。年中児には特定の傾向はないが、『遊び』『人間関係』『感情』の順に理由として挙げる者が多く（順に、選択者31の内7（22.6%）、5（16.1%）、4（12.9%））、小学生との比較と同様、現在の自己や環境への満足を現す結果となった。年長児においては、「大人になったら遊べない」という『遊び』に関する理由を挙げる者が1番多かった（選択者13の内5（38.5%））。このことは、年中児の現在の遊びが楽しいからというものとは若干質が異なるように感じた。年長児のこれは、自己ではなく、大人の方に視点が置かれている。つまり、現在が楽しいからというものではなく、大人になったら仕事をしなくてはなら

なくて遊ぶことができないから、という考えである。このことは、年長児が他の成長段階の役割を捉えており、それを踏まえて自己を見ることができていることを示していると考えられよう。

最後に、老人と比較したときの自己選択理由について述べる。年少児はほぼ無回答であった（選択者16の内13（81.3%））。年中児、年長児は共に『老化』を理由とする者が多かった（年中は選択者49の内16（32.7%）、年長は選択者41の内13（31.7%））。彼らは、「すぐ死んじゃうから」「寝たきりなるから」といった老人に対するマイナスイメージを持っているようである。これらは老人期の特徴であり、成長感とは異なるため、『成長』カテゴリと区別して『老化』カテゴリとした。また、年長児に特徴的であったのが、『感情』カテゴリに分類された、「おじいさんは格好悪い」「おばあさんは変」といった、老人へのマイナスの感情や評価である（10（24.4%））。もちろん、老化や死は老人期の避けては通れない重要なテーマであり、幼児が老人に対してマイナスイメージを抱くのもおかしいことではない。しかしながら、寿命が延び、高齢社会が進む現代において、老人は社会的役割も担っている。ただの弱い人ではなく、英知を持つ人として、老人の姿を見ることによって幼児のイメージは変わるのではないだろうか。

ここからは、自己ではなく比較対象を選択した場合の選択理由について考察する。

まずは、赤ちゃんと自己を比較して赤ちゃんを選択したときの理由であるが、年少児では赤ちゃんを選択した者は全くなかったため考察から除く。年中児、年長児は、共に選択理由のほとんどが「かわいいから」という『感情』によるものであった（年中は選択者12の内9（75.0%）、年長は選択者2の内2（100.0%））。

次いで、小学生と自己を比較して小学生を選択したときの理由について述べる。年少児には特定の傾向はみられなかった。年中児は「大きいから」という『成長』に関するものが1番多く、「学校に行きたいから」「勉強がしたい」という『学校』に関するものが2番目に多かった（順に、選択者39の内13（33.3%）、11（28.2%））。年長児ではこれらが逆転し、学校に関するものが多くなる（『成長』『学校』の順に、選択者32の内6（18.8%）、15（46.9%））。このことから、年中児は小学生を“大きさ”という可視的な身体的側面から捉えており、年長児は“学校”とい

う社会的側面から捉えているという違いが読み取れる。

続いて、大人と自己を比較して大人を選択したときの理由について述べる。ここでも年少児に特定の傾向は見られなかった。年中児は「大きくなりたいから」という『成長』に関するものと「料理ができるから」「運転ができるから」等の『能力』に関するものが同人数で大半を占めた（順に、選択者36の内10（36.0%）、10（36.0%））。年長児は『能力』に関するものが1番多かった（選択者32の内10（32.0%））。これらのことから、年中児と年長児は、大人は自分たちにはできないことができると考えており、そこに憧れを抱いていることがわかる。

最後に、老人と自己を比較して老人を選択したときの理由について述べる。年少児と年長児は人数が少ないことから特定の傾向を見出すことは困難であった。年中児は「髪の毛が長いから」「眼鏡をかけるから」といった、『その他』に分類されるものが多かった（選択者18の内7（38.9%））。また、このような髪の毛の長さや眼鏡は、個人的要素であって、多くは老人の特徴とは言い難いものであった。つまり、老人というものではなく、老人である特定の誰かに対する憧れから、老人を選択したと思われる。

まとめと今後の展望

年少児は他の成長段階についての知識を言語化することは困難であるが、現在の自己と比較してどちらがよいかを選択することはできた。選択の結果から、現在の自己に対して満足し、身体の大きさに価値を置いている時期と考えられる。これは周囲への関心が弱く、自己しか見えていない、見えたとしても表面的な部分にとどまる故の結果であると考えられる。

年中児は、他の成長段階の人々について知り、自己と比較できるようである。ただし、「認識」「比較」において扱っている対象は具体的な「誰か」であった。選択において個人差が現れたのはそのためかもしれない。したがって、この時期はその「誰か」である周囲の人物が、他の成長段階に関する知識の形成に重要な影響をもたらすと考えられる。

年長児は、他の成長段階の人々についての具体的な知識が積み重なることで、一般化された知識が形成されているようである。また、選択の結果から小学生と大人への憧れが読み取れる。老人の選択が低く、理由から老化や死への

抵抗がうかがえ、外見だけでなく成長段階それぞれの特徴を認識していることがわかった。

本研究では、Zazzo (1969/1974) の『発達の力動過程検査』に変更を加えて実施した。その結果、4歳児よりも5、6歳児の方が現在の自己に満足しているというZazzo (1969/1974) と都筑 (1981) の結果とは異なるものとなった。このことに関しては、全く同様の方法論で実施したわけではないために、その理由を方法論における違いとするのか、幼児の自己と他の成長段階の人々の捉えの違いとするのかははっきりとは述べることはできない。しかしながら、本研究では方法論において先行研究よりも丁寧に実施しており、より幼児の実態に迫ることができたと考えている。

以下に3点の変更それぞれについての考察を記す。まず、1点目の選択の前に認識や比較といった言語的回答を求めたことに関してである。このことによって、各成長段階について幼児がどのような知識を持っているのかを探ることができた。また、その知識を意識化させた上で選択を求めたため、より幼児の持つ知識を反映した結果となっていると考える。

次に2点目の「自己」と「各成長段階」とを一对一で組み合わせさせて選択させたことに関してである。先行研究では「自己」はいくつかの選択肢の一つにすぎなかったが、この変更により、「自己」を基盤とする課題となった。その結果、「自己」と「それ以外の成長段階」との比較が丁寧にできたと考えられる。

最後に3点目の選択肢に「小学生」と「老人」を加えたことに関してである。本研究の結果から、「小学生」とはどの年齢においても捉え難い存在であることがわかった。しかしながら、特に年長児にとっては憧れの対象となっていることが示された。また、「老人」については年長児では「他の成長段階」とは明確に区別されており、年少児・年中児でも、「老人」についての知識が形成され始めていることが示された。この変更点によって、各成長段階について幼児期にその特徴を理解し始めていることが示唆されたといえよう。

今後の課題としては、どの年齢においても幼児にとって未知の存在であった「小学生」という対象についての幼児の理解に関する検討である。小学生は、次に所属する社会的集団であり、幼児にとって重要な対象でありながら、一番理解し難い対象であった。現在、幼保小連携活動

など、幼児と小学生とを結びつける取り組みが多くなされてきているが、これに関する幼児側の変化や思いについては体系的には研究されてきていない。幼保小連携活動が幼児にとってどのような意味があるのかを探ることは、幼保小連携活動のあり方を問う上でも重要であると考えられる。

引用文献

- 橋本彩香・松永あけみ (2006). 幼児期・児童期初期における自己認識の発達－他者認識の発達との関連から－*群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編*, **55**, 257-276.
- Mead, G. H (1934). *Mind, self, and society*. **11**, Holt & Co. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野 収訳 (1973). *精神・自我・社会*)
- 森加代子 (1995). 幼児にとっての「大人になる」という現実 *奈良女子大学人間文化研究科年報*, **10**, 31-39.
- 中島伸子 (2002). エイジングに伴う変化についての子どもの認識 *人間文化論叢*, **5**, 23-31.
- 富田昌平 (2004). 幼児期における「将来の夢」と空想／現実の区別認識 *幼年教育研究年報*, **26**, 105-113.
- 塚野州一 (1993). 時間軸における自己意識の発達研究の意義について *富山大学教育学部紀要A (文科系)*, **44**, 111-119.
- 都筑 学 (1981). 幼児の自己意識の発達 *教育心理学研究*, **29**, 1, 70-74.
- Zazzo, B (1969). Le dynamisme evolutif l'enfant. In R.Zazzo.(Ed.) *Des Garçons de 6 a 12 ans*. Paris : Presses Universitaires de France. (久保田正人・塚野州一訳 (1974). 発達の力動過程 学童の成長と発達, 明治図書.)

謝 辞

調査にご協力頂きました幼稚園、保育園の先生方、そして園児のみなさまに感謝申し上げます。